



盲学校 支援だより

No. 5 石川県立盲学校

平成28年3月

盲学校というと目の見えなくなった学校というイメージがあるかもしれませんが、実際に本校に在籍する全盲の生徒は少数です。むしろ、盲学校には視野（見える範囲）等視力では測りきれない見えにくさのある弱視の児童生徒が多く学んでいます。※

今回は、本校に入学した理療部の生徒から聞いた、これまでの体験談（見えにくくて困ったことや、盲学校に来てわかったこと、できるようになったこと等）を紹介します。

※ 盲学校の入学基準は「両眼の視力がおおむね0.3未満のもの又は視力以外の視機能障害が高度のものうち、拡大鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が不可能又は著しく困難な程度のもの」（学校教育法施行令）です。

「見えているのに、白杖を使っている。」と言われるのですが、弱視なので全く見えないわけではありません。色にハッキリした違いがあれば足元見えますし、大きい文字も見えます。ゆっくり歩けば柱や人にぶつからないように歩けます。そのため、普通に**見えていると誤解されることがありますが、はっきりと見えていないので歩く時は怖い**です。



視覚障害がなければ、白杖を持つことはできません。**白杖を持っているということは、すなわち何らかの視覚障害があるということなのです。**そのことを理解して配慮をお願いします。ちなみに、道路交通法では「杖を携えて・・・通行しているときは、一時停止し、又は徐行して、その通行又は歩行を妨げないようにする」ということが明記されています。



自分はそんなに目が悪いとはきづいていなかった。盲学校で**拡大読書器**を使ってみて、初めて**きちんと見えていなかったことがわかった**。今は、拡大読書器を使って、教科書も読んで新聞も読めるようになった。



生まれた時から見えにくさがある場合、本人にとってはその見え方が当たり前になっているため、**実は本人が見えにくさに気づかないということが往々にしてあります。**補助具を使ってはっきり見えた時、見えるということが初めて実感できるのです。



授業中に先生が不快な顔をして生徒に静かにするように訴えていたらしいが、それが見えなかったため、クラスが静かになった時盛り上げようとしてふざけてしまい、先生に叱られた。なんで叱られたのか全く分からなかったが、後日先生が母にその時の事を話したため、説明を受けて初めて状況がわかった。



弱視の人にとって、細やかな表情の違いに気づくことはとても難しいことです。「顔を見たのにあいさつもしない」と誤解されることがありますが、それは見えにくさからくるものなのです。本人からは難しいので、見える方の方から声をかけてください。



盲学校に来るまでは、見える人たちの中で見えづらいことを言うこともなく一人で困っていた。親が学校に知らせていても、先生方は、自分が見えづらいということはほとんど忘れていたようだ。ノート等に近づいて見ると「顔を話して書きなさい。姿勢が悪くなるから」と注意を受けることが多かった。ノートから離れたら自分は見えなくなるのだけど・・・



弱視の人は見えづらくてもなんとか行動できるので、「見えている」と思われ、周囲と同じように行動することを求められてしまいがちです。「顔を近づけて見る」という方法は、弱視の人にとって有効な方法だということを理解してください。



盲学校は、全盲の人が学ぶ学校だと思っていたが、弱視の方が多かった。みな、障害を持っていても笑顔で生き生きと学校生活を送っていて、自分も頑張ろうと思えた。同じ悩みを持っている人たちが、そばにいて相談がしやすい。盲学校で、同じ気持ちになれる人がすぐそばにいたことが安心できる。これまで道を歩く時も危ないことがあったが、安全に歩く方法も教えてもらい危険を回避できるようになった。



「障害の理解と支援と仲間」これが大切なポイントなのではないでしょうか？



見えにくさに気づいたら、気軽に盲学校に相談ください。一緒に支援を考えたいと思います。(TEL 076-262-9181)